

教会短信

2005年8月7日

No. 4

牧師 間瀬 善彦

また悲しむべきことが起こってしまいました。イギリスでの同時テロによって、多くの人が死に傷ついてしまったのです。テロは、白昼無防備な人に突然襲いかかってくるという点で、まったく憎むべき行為です。テロはどのように繰り返して起こってしまうのでしょうか。世界中の目がイギリスの同時テロに注がれている時にも、イラクでは、毎日のようにテロが起こり、多くの人びとが死傷しているのです。

テロのニュース報道を聞く時、思い起こされるひとつの出来事があります。あのアメリカでの同時多発テロから数ヶ月がたったある日、ひとりの女性が教会を訪れてくださいました。教会のチャイムが鳴り、わたしが玄関に降りていったところ、彼女は礼拝堂の中で祈らせてください、と申し出られました。理由はわかりませんでした、とにかく教会に祈るために来てくださったのです、快くどうぞとお答えしました。彼女は礼拝堂の一番前の席に座って、うなずいて静かに祈っていました。涙を流しているようにも見受けられました。彼女が祈りをしている間、わたしは少し心配な気がして礼拝堂の入口に立って見守っていたのです。そしてしばらくして心が落ち着いたのでしょう。彼女は立ち上がって出てこられましたので、しばらくお引止めしてお話しを聞くことにしました。彼女が教会に祈りのために訪れてくださったのは、アメリカの同時多発テロで恋人を亡くされたためでした。その方を思い浮べ、涙を流しながら祈っておられたのでした。テロはその場において被害を受ける人だけではなく、その被害者の家族、親しい人の心にも深い傷を負わせるものなのです。

もともとパレスチナがイスラエルに自爆テロを起こすようになったのは、イスラエルの圧倒的な軍事力に対抗する手段がなく、自爆という方法しかなかったのだと言われていますが、理由はどうであれ人の生命を奪うテロは断じて許すことができません。

今、世界は敵意に満ちています。殺戮きつりくと報復が果てしなく繰り返され、絶望が支配しようとしているかのようです。このようなときこそ、聖書の御言葉にわたしたちは耳を傾け、心を静めて平和のために祈りを合わせたいものです。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである」(マタイ5章9節)。

信仰の道程

私は、物心ついた時から、つまり幼稚園の頃から、キリスト教の幼稚園に通っていました。従って、主な聖書の話や御言葉は聞いて知っていました。そして訳も分からず礼拝にも出席していました。しかし、父の仕事の都合で引越しを余儀なくされ、つまり小学校に入ってから教会にも全く行かなくなりました。小学校3年の時に、父の仕事の都合で、一家揃ってアフリカに行きました。私はそこでとても楽しい思いをして帰国したのですが、母は逆に大変な苦勞をしたらしく、人間の力の限界を感じたと言って、日本に帰ってから近くの教会で洗礼を受けました。その7年後、妹が洗礼を受けました。その頃から母が私に洗礼を受けさせたいと思っているのではないかと疑念を抱き、教会にも行かなくなりました。その後大学生になり、卒業後の進路を決めるときがやってきました。私はかねてからの夢だった語学留学をすることに決め、スペインへと旅立ちました。始めの一年間は見る物聞く物すべてが新しく、あっという間に過ぎて行きました。しかし、ある程度スペイン語が出来るようになってきた2年目は、目的意識を失い、当時不況の真っ只中にあった日本にも戻る気になれず、半ばノイローゼのようになってしまいました。

そんな時に母から、アメリカにいる父の友人の家に遊びに行つてはどうかという助言を受け、スペインを引き払い、今度はアメリカに行く決心をしました。しかしながら、アメリカに行つてもノイローゼは治らず、一日中部屋に閉じ籠りっきりの日が続きました。当然ホストの方はとても心配をして下さっていました。そんな時その息子さん遊びに来て、ホストの方が私の事を息子さんに相談したところ、息子さんの奥さんが日本人教会を探して下さいました。現地の日本人の方と話でもすれば、少しは気が紛れるのではないかとこの配慮からでした。こうして礼拝に出席している内に、牧師先生の話が心の琴線に響くようになってきました。その頃から自然とお祈りをする様になりました。その後、洗礼を受ける事が、神様の御心にかなった事であるなら確信を与えて下さいと祈りました。するとその週の日曜日に、いつもの様に礼拝前の聖書の学びに出席した所、講師がたまたま牧師先生でした。終わった後牧師先生が、「どうですか、そろそろ洗礼を受けてみませんか」と言って下さったのです。実は、私はそのことについて祈っていたのですと先生に告げ、そして洗礼を受けるに至りました。その時私は、神様は御心を人を通して語って下さるという事を初めて知りました。洗礼を受けてからの私は、神様によって大きく変えられました。以前はちょっと嫌な事があると、すぐにベッドにもぐり込んで現実逃避をするのが常だった私も、聖書に、神様は越えられない試練は与えない方ですと書いてあった事によって、試練にも立ち向かう力が与えられて来ました。ノイローゼも癒され、今は元気に教会生活を送っています。目的意識の様なものはまだ持つことはできませんが、何よりも神様によって生かされ、一切の思い煩いを主に委ねてよいのだという気持ちになり、不安感がなくなり、気持ちが楽になりました。最後に私の好きな御言葉で締めくくりたいと思います。

「植える者も水を注ぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させてくださる神のみである。」(コリント人への第一の手紙3章7節)



日本を救ったキリスト者の祈り(1)

8月15日は、我が国が太平洋戦争に敗れてから60年の、その記念日である。謂わば、軍閥支配から、平和への道を歩み出した日である。筆者は、子供心に戦争を体験したひとりであり、学童疎開も、空襲という無差別殺戮^{きつりく}の凄さも体験している。今号は、転換期の日本をテーマにしてみることにした。

【戦争から終戦へ】

1941(昭16)年12月8日、未明の真珠湾攻撃より、日中戦争は一転して、第二次世界大戦へと暗黒の時代に突入した。山本五十六司令長官の「二年間は暴れてみせる」の言葉通り、当初は連戦連勝、大日本帝国の声高らかであったが、あとはジリ貧、1945(昭20)年3月10日^{そうぎょう}早暁の東京大空襲。死傷者12万人余、罹災者^{りさいしや}104万人といわれた。文字通り、東京は火の海、熱風のため隅田川に浮かぶ舟まで火を噴いた。地獄絵巻そのものであった。8月6日、広島への原子爆弾投下で、完全に降伏せざるを得ない状態に陥った。そして、ポツダム宣言受諾に至ったのである。資源のない小国が無暴にも、持てる国アメリカを主とする連合軍を相手に戦ったのであるから、冷静に見れば、最初から勝敗は知れていたものと思う。そこから、新しい日本のスタートとなったのであるが…。

【そして、戦後】

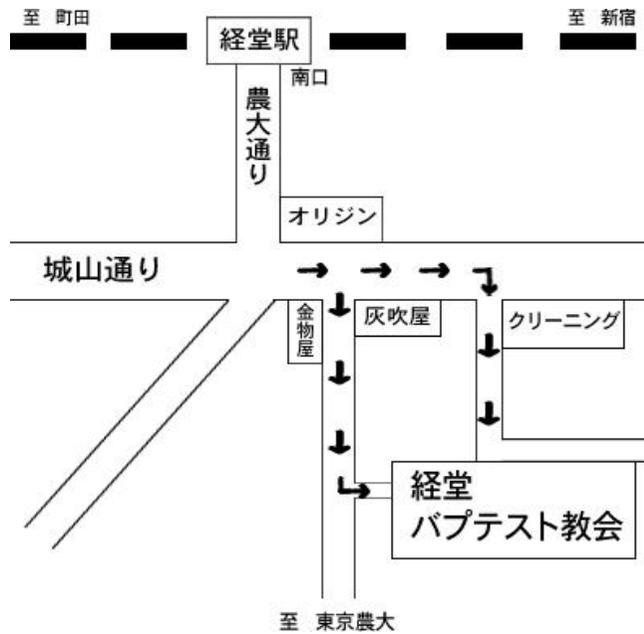
「仇をもって、仇に報いず」という言葉をご存知であろうか。中国・蒋介石総統の言葉である。異論、反論の方もあろうが、日本軍は、日中戦争(支那事変)において、中国人に対して凄惨な戦いをしたと言われる。蒋介石は、「日本はひどい。日本は残虐だ。だが、今日も賀川先生が熱涙をもって、この中国のために祈っていることを思うと、日本を憎み切ることはできない」と、言われたという。そして、帰国希望者は、全員帰ることができたのである。

後に、世界の賀川と言われた賀川豊彦牧師は、当時、神戸に住み、貧民窟の共同トイレの脇で、熱涙と共に、特に中国・朝鮮・東南アジア諸国のために、毎日熱い愛の思いをもって祈った。「日本人に危害を加え、その物資を掠めるものは極刑に処す」これも、蒋介石総統の布告である。自国を荒され、多くの民を殺されながらも、日本に対して賠償金の請求もしなかったのである。

(以下、次号へ)

集会案内

主日礼拝	日曜日	午前 10時30分～11時30分
教会学校	日曜日	午前 11時45分～12時30分
青年科・成人科		
聖書を学ぶ会	火曜日	午後 1時 ～ 2時
聖書研究・祈禱会	水曜日	午後 7時30分～8時30分
英語教室 (英文法)	火曜日	午後 7時30分～9時
(英会話)	金曜日	午後 7時 ～ 8時30分



経堂バプテスト教会

牧師 間瀬 善彦

〒156-0053 世田谷区桜1-64-30

TEL 03-3426-0071

当教会は、エホバの証人、モルモン教、統一協会とは一切関係ありません。